ミラレパの接得法（２）[1)]

佐　藤　道　郎

(P.329 ℓ.10)
尊者よ，得成就のラマ，偉大なる宝よ
あなたは住いに我執をおもちにならないから
御着物も決ってなく，遊行しておられ
ある時は山頂に赴き
ある時は城市の街道にねむり
たった一枚の衣で，御衣がないのと同様で
裸でいらっしゃるのが寒々しい
私，少年が体にまとっているこれは
素材は雲と水，紫色のメントリという衣を
仕立職人が縫い編んだもの
内には小さな種々の白雲を内につけていて
上衣は綿緞を切り縫いつけています
下には獺の裾の縁どりをつけています
襟の周りは貂の跳びはねるのがつけられて
綾の帛の腕と肩のおおいをつけ
これを着ると輕く気高く，とてもりっぱです
冷たい風でも大丈夫
普通，大臣貴族の着物です
師父，尊者よ，お体にこれを着用して下さい
(P.330)
それがしに恵をたれて下さることを

とお願いしたのですが，尊者は受けとらず，「汝のそれより，よりよい上衣が私自身にある」と言って，彼の請いに対する答として歌を述べました。

子[2)]のように親愛な少年よ，聞け，怜利な者よ
總じて六道輪廻の城市において
悪業の風に追い追われて

1）この論文はArtes Liberales №51（1992）のpp.1−10に掲載された同表題の（Ⅰ）につづくものである。原典等基礎資料は（１）に使用したものと同一である。

2）チベット語における親族稱呼は他人に対しても用いられ，その稱呼の雰囲気を転用してもいる。すなわちここではbuは，自己より若い者に呼びかける人が子の如くいとほしく思う感情等をこめている。また時には若い者であり，弟子であり，これを強調した言い方は精神子という如きもある。後に出てくるkhyod ma（あなた，お母さん）も実際の母のことでなく，母のようにやさしい心をもつ人に言うのである。その場合はミラレパの母では全くあり得ない。チベット社会における親族構造を基盤とした人間関係の観点がここに一端を示している。

自己自身自主性なき意識が廻り
生死中有の荒野をさまよう
夢である中有の山頂に到り
生存の中有の街道にねむる
私は勝義の目的を追求し探し求める
素材の清浄な白い雲と水を
誓詞と戒律の布が掩う
熟慮に従った制作によって縫う
姿は三つのヨーガが上衣
三つの要点を混合した襟をつくる
臨死の時の大いなる光輝によって肩腕をおおう
清らかな幻身によって結合して
中有をわかる縁どりをする
それがヨーガ行者私の上衣である
汝の紫色のものを私は欲しない
子の如く親愛なる者，施主よ，快適にどこなりと安らかに去れ

とおっしゃったので，更に少年が請問しました。「尊者よ，上衣を受取らなくても，衣類が薄うございますので，上衣の上につけるチベットの厚い毛織物，これをどうしても差し上げたい」とお伺いしました。

それでは，最上の人，偉大なる宝よ
三夏，暑熱の王者が現れ
杜鵑が啼い宣言しているのが耳に聞える時
裸身でいらっしゃっても全然(P.331)寒くないでしょうが
三冬の間，大地が呼吸を絶って
御着物が單衣の布では薄く
年が改ると風が強く刺します
師父よ，尊者よ，辛い寒さです
紫の上着の上に掩っているこれは
もとは代々伝わる山羊の白い皮を
紫の綿麻で縁どりをし
りっぱな絹の前づくりに
五色のいろいろな色の美しい布の紐で包んでいます
前の（襟）の布は拇指を立てる仕方による模様の絵です
少年，私の衣服です
尊者，布衣の人の着衣に献上しますから
私めを慈悲心で攝取して下さい

と言って請問の意味を申し上げましたが，尊者は受けとらないで，「汝のそれより，よりよい着物が私自身にある」と言って，彼の伺いに対する返事として歌を述べられました。

母のようにやさしく恩ある者，その者よ，こちらに聞け
私は無明の錯乱を引導として
（下が）見えない恐るべき淵に到った
煩悩の熱が大変熱くまた冷い
悪業の成熟が雨のように降る
今（輪廻からの）解脱の村へ逃れることをも求め
素材としてのはげしい臍輪の火をもつ白い山羊の皮に
四つの脈がめぐる上衣をもち
内なる風と心が合し縁をしつらえ
暖かく精液を燃え立たせ，もれしたたる綿鍛を
心身の安楽と空との双運の紐によって包む
それは俱生の熱の衣である
内なる熱の衣に夏冬はなく
外見は南方の羊毛の毛の着物が美しい
たった一枚の布衣は軽くて安楽
汝の衣服を私は欲しくない
それ故，施主よ，自分の家に行き(P.332)なさい

とおっしゃったので，さらに少年はお伺いする意中を申し上げました。「尊者よ，あなたは御着物を欲しなくとも，昔より，長時の成就の行をなさっていらっしゃいますから，お体が弱っていらっしゃいます。私のこの帽子を差し上げますから，帽子を賣って肉に換えて，お体を養うことをお願いします」と言ってお願いの意味を歌で申し上げました。

さて，最上の人，ヨーガ行者よ
あなたは輪廻の法を出離しました
道は生死二つからの解脱を求めて
一頂に成就をなさることをお考えになって
難かしい修行をくりかえして
お体は辛い寒さを感じておりましょう
私めの頭にかぶっているこの
帽子はインドの素晴らしいもの
希有で大きな宝，錫を
機械職人が縫うことを学ぶことによって
凸出している絵模様と摩羯魚を内外にし
柔軟な鳥の王の鳥の羽を帽子の上に飾りつけています
小さいマフラーで首を巻きなさい
これを賣ると大きなヤク牛の肉と同じ位の山をなし
化身であるあなたに献じますことによって
味のよい栄養ある肉に換えて下さって
師父よ，尊者の御身を養うことをお願いします
私は夏冬，下僕として随行することをお願いします

とお伺いしましたが，尊者は肯はず，彼の請問に対する返答として歌を述べられました。

子の如く愛しき者よ，聞け，眼を晦ますな
私はナーロパー大譯师の弟子として相続し，この事は
道である縁起の要点を獲得しており
方便に深く熟達し，解脱に到っているから
内に生ずる風を私は怕(P.333)れない
滋味あるいろいろの肉に依存しない
寒冷な風がどのようであろうと歓喜し，更に歓喜している
私の頭頂の飾りにある
荘厳は日月の如くはっきりと美しく
そは尊者（ナーローパ）が如意宝珠，化身
名号は有名な訳師
彼の方は屍林（の行者の）飾りによって美しくいまします
汝，恭敬の眼によって目でみてわかるなら
聖なる執金剛と眼のあたりに逢う
仁徳によって子の如く保護するのは確か
それを心中にかくしているのは頭上のかざり
外に向ってはインドの学者に問うのは美しい
汝の帽子を私は欲しない
愛しき少年よ，安んじて去処に去れ

とおっしゃいましたので，更に少年の思いにおいては，「尊者はこれ程に教誡の一束を少しも許さない。これは以前のそれらの献じたものが少いのかしら」と考えて，首のトルコ玉一包みあるそれをとって，請問の意中として歌を献じました。

然らば，最上，稀有な人よ
あなたは執着なく，修行し，更に修行して
如何に現れるも幻化とごらんになるから
多くの財の欲望はおもちにならなくとも
私自身力がなくても信心が生じ
師父よ，集めた食物や財物を
子は放拾可能であるのに献じなかったなら
仏がはっきり見ないところでも心から恥づかしい
明日以後，人の心を幽鬼が変えます
尊者よ，それ故に欲しないとおっしゃらないで下さい
六角の白光のトルコ石[3]は稀有に大変輝きます
胸かざりの白く燃えるようなこれは

3） トルコ石はチベット人にとって招福のしるしとされているもので，喜捨に捧げられたものは殆どチベット人の貴族，金持ちの一般に所有し，身につけていた高価なものである。それらをすべて断るところに無欲なミラレパの姿が対比的に明らかになる。

麝香牛の皮の柔らかな紐で穴に通されていて
赤サフラン色(P.334)の台座にまとめてあり
これを賣るならば，俗人の貧と離れ
尊者よ，最勝の首に捧げますから
恩ある仏法を与えて下さることをお願いします

とかようにお願い申し上げてトルコ石を捧げましたが，しかしまた尊者はトルコ石を意趣されませんで，「汝のトルコ石は私には要らない。それよりもっとよい財宝の大きいものが私にある」と言って，彼の請問に対する答として歌を述べられました。

愛しき者よ，施主よ，聞くべし，師父，有恩の人に
総じて広大な国土の各地に
遠い道を行くヨーガ行者は游行する
せまい城市の街道の門口に
食べるべきものを求め少しづつ受取り
良い食事への執着を転じている
また衣食の資財に満足せず
財を集めて残りが見える時に
汝，金持ちの財産に願望をもたないであろう
私は知足し（ヨーガ）王の財産の庫には
口耳相伝の大いなる財宝
体験者の飾りを置くその者は
念じて不忘の清除をなしており
四更（朝から晩まで）のヨーガを穴にとおして
自心をわかる少年のかざりとして美しい
汝の頸のトルコ石を私は欲しくない
愛しき者，少年よ，安楽に道に就け

と尊者が歌をかように述べられました。更にまた彼の思うには「尊者，この化身者は私を罪悪あるものとごらんになって，心にかけていないのか」と考えて，「最上の人，あなたは幻の宝に目もくれないので，更に今三つの武器，刀，弓，槍，これをあなたに捧げます。今以後は武器を捨てて，殺生を止め，戒を受けてどうしても，恩徳(P.335)による救済を」とお願い申し上げて，虎の皮でつくった六種類の資具を献じて，請問の意味を歌で捧げました。

然らば，最上の人，慈心をもつ人よ
私は以前戦場で敵中で敵をつかまえ
敵の頑強な首すじを手放しはしなかった
右はまだらで火焔の模様の革袋
それは矢と弓を取出す場所である
左はりっぱな小さい班点の模様の豹の鞘
それは最上の白い弓のかくしどころです
襟布は拇指を押す仕方の模様をもつ

それは強力な軍神の依りどころであり
私が六本の弓を腰につけるとき
俳徊するモンゴル人[4]が盗賊に行くのと同様
怨敵が見えた時心がさわぐように
野性のヤクを草の芽に招いても石山に逃げる
今，それ故に思い起し追憶しています
今，以前にした行為を追悔し浄めています
今は三つの武器（刀，弓，槍）をあなたに捧げます
今から誓いを承諾します
尊者が赴かれるところに召使いとして随行することをお許し願いします

かように請問の意味を申し上げましたが，尊者は受け入れず，「愛しき者よ，汝は誓いを護持することは出来ない。三つの武器の献上をもまた私は欲しない。汝のそれよりりっぱな虎の皮でつくったものが私自身にある」とおっしゃって，彼の請問に対する答として歌を述べられました。

愛しき者よ，無敵の丈夫よ，こちらに聞け
対境である邪分別，錯乱を観察するとき
敵なる五毒の有漏が走り廻っている
今，勝敗を融和しないならば
後に解脱なき牢屋に入る危険がある
ヨーガ行者は敵に対し戦場に出ていく
外に見えるのは斑らな虎の皮の矢袋
(P. 336)
内には執着なき，十分にはっきりした豹の皮の矢袋をもつ
偉大なる智慧の刀と
広大な双運の道の禪帯[5]に
温いしるしの功徳の拇指押し模様[6]がある
それはかくされた内なる六つの大いなものである
勝義においては，無生，空の弓（という智慧）に
方便としては菩提心の矢じりの弓を引いて
四無量（心）の矢を射るならば
五毒の敵の軍勢を転退させることは確かである
業，煩悩の兵団は退却している

4） このモンゴル人はhorと出ていて，このことばは時代によってチベットから見た北方の民で，必ずしもモンゴル人とは断定し難い。またhorは鷹や隼の如き猛禽類でもあり得て，「鷹が掠奪にのして行く」という意味にも解される。この時代にモンゴル人の興起（例えば1229年のモンゴルの西夏征服）があったが，この譬えがチベット人にどれ程近いものであったかは尚問題を残す。あるいは後代の添加であらうか。

5） 坐禪する時腰又は頭にしばる紐である。

6） このことばsen thab mdo lonは辞典に見えない。ただ一つRinchenの“Sumatiratna”に出ているが，その出典は明らかでなく，チベット人達はこの辞典の説明を肯じない。どんな模様か絵なのか確認出来ないが，胸の襟，または肩から胸にかけて下げる胸紐についているあるパターンの絵であると解せられるが，具体的には不明である。

それがヨーガ行者，私の敵に対する方便である
汝の虎の皮のものを私は欲しない
愛しき者，施主よ，安楽に家に行け

尊者がそのように歌でおっしゃったので，さらにまた少年が請問するに，「最勝の尊者よ，あなたが三つの武器を受け取らなくては，恩徳ある人に請問する手だてもありませんから，腰帯のこの脇差とこの刀を」と言ってさらにまた差し上げながら「慈悲心をお持ちになる仕方でどうぞ御受納を」と言って請問の意味を歌で献上しました。

尊者よ，化身よ，お聞き下さい，ヨーガ行者よ
（自身は）法を知ること多くとも成就は少ない
成就の兆候が出るのは百の中一つ程
師父よ，化身であるミラレパの外には
一切法を私は請問しません
あなたが難行なさった勝法に
私は全然何もなくて，あげることが出来ません
ネパール中部の生鉄に
雲の水文の柄をもち
鋭利な生鉄でできたライオンの頭の柄に
鞘には鉄と白銀の瓔珞があり
多くの刀の把手（で紐をつけるところ）には鉄の提げ紐と
黄銅の提げ紐の二本が
私の勇壮な腰には美しい
総じて青荘な男子(P.337)の完全な飾として美しい
私は信心のこの御礼品を捧げますので
また修法の若干のおことばもお願いします

かように請問の意味を歌にしてから，腰帯と曲刀を御手に献じたので，尊者は御口ずから，「私の禪法を今教示するのはふさわしくない。汝の礼品もまた私は欲しくない。刀と腰帯は汝のそれよりより良いものが私自身にある」とおっしゃって，彼の請問に答え歌で述べられました。

愛しき者よ，無敵の勇士よ，こちらに聞け
雪山中を遊行する私の獅子の安らぎには
精要と甘露の如き乳があり
それは至宝である黄金の杓子でないならば
並みの容器の諸々には何も注げない
私は不動で実直な腰のまわりを
（帯の）こわれない根本をがっちりした長い布でしばり
心は虚偽なき水文を描く
鋭い智慧の曲刀に
修行の眞実は三つで基準の鉄の鞘をもつ

聖教の信仰は鉄の秤の下げ緒
精進は金の秤の下げ緒の二つ
総じて法を行ずる人の完全な飾りとして偉大である
私は空行母の断罪が怕くて怕くて
以前にも財のために法を売らなかった
今でもまた礼品を受けることをしない
愛しき者，少年よ，家に帰りなさい

と尊者がかようにおっしゃったので，また少年がお伺いするには，「尊者よ，ヨーガ行者であるあなたに財物を差上げても，何も受け取らないので，更に閑静な寺庵を差し上げますから，そこに安坐していただいて，請問致したい」と請願の意味を歌で献じました。

(P.338)
尊者よ，受用のヨーガ行者，やり方を持する人よ
あなたはふさわしくない事への執着を転じていらっしゃる故に
牢獄としての故郷を背后に捨てました
地域に区別なく人界をめぐられる
御身は苦楽の展開[7]を断っていらっしゃる
今，一つの場に在しまして修証を増大しています
寺庵を山のふもとにつくり
天然の清らかな柱に
はっきりと日月星宿が映り
中国の墨が青い石の大地に
石でつくった朱砂でマンダラを画き
錦葵の花の集りを安置し
外は堅固な壕をめぐらし
対治は木の屋上の垣根をしつらえて
八つの土台のある塔は荘厳として美しい
我々世俗の人々は信をよりどころとし
師父よ，尊者の寺に献じますから
御心は急がずに休養に在られることを願い上げます

と献上しましたが，尊者は受けとらないで，「土地神に執持された寺に私は安住しない。順じて行うべき不法を私は知らない。それより私の以下の歌を聞け」とおっしゃって，彼の請問に答える歌を述べられました。

しからば，勇士よ，幻化の飾りよ
今生は一切無常で幻にすぎない
死者の王が到る時には

---

7) この原語はサンスクリットのprapañca漢訳では戯論とされている語であるが，サンスクリットもチベット語も現象の展開という意であり，時にチベット語では戯論の意に用うこともあるが，少いので展開と訳した。

汝，富者は財宝によって交渉する場はない
英雄が刀を揮う場はない
臆病な狐が逃げるべき土地はない
時がすぎいく程に，肉等は悪くなる
今，このよう[8]な怕れから安息の地をつかみ
内には，不生の心の寺に
中間には，不動の風によって屋上の柴垣をしつらえ
土台の上に不変な本当の柱を建立する
道は生起と(P.339)究竟（次第の）日月星宿が移動する
禪定の暖かき大地に
觀察の朱砂によってマンダラを描く
安楽は光り輝く無分別の花束を安立する
十善である美しい八つの脈管を
堅固な空性の壕によってとり圍む
それがヨーガ行者である私の寺である
汝の寺を私は欲しない
愛しき者よ，施主よ，安楽に家に帰れ

とかようにおっしゃって寺を受け取らなかったので，更にまた少年が請問するに，「ラマよあなたが寺を受け取らなくとも，御身は幻であるから，病気になります。私の妹は有能で信心を有つ者で，それを妃として差し上げますから，鷹揚になさって受け容れることをお願いします」と請い意中を歌にして献じました。

尊者よ，洞窟を遊行なさるヨーガ行者よ
あなたは女子を罪過あるものと觀察するそれによって
執着心を起すことはなくとも
お身体ははかないから病気になることがあり
同情ある知己としての一人の友が必要です
私のこの三人兄弟のたった一人の妹です
師父よ，良い家柄の女性です
しっかりした女性は利益を変化現出します
市場や天や人の集りの心を楽しませる女
尊敬すべき地方の王（土司）の妃になる人
衣服は仔山羊と母牝牛で，絹を飾る
きらめく虹の波紋をもち
黄金の頭のトルコ石のリボンに
瑪瑙石をつなぎ合せたじゅずをつけ
好ましく，美しく，楽しさをもって描くにふさわしい
求婚者達があっても，誰も選ばなかった
今，化身のあなたに捧げます

8）de kasをde gaに読む

心を(P.340)小さくせずに受け取って下さい

とかようにお願いの意を捧げましたが，尊者は受け取らず，「愛しき者よ，かように言ってはならない。私は輪廻する夫婦の絆を心から断っている。我執の妻を心から欲しない。現在の信心は偶来的である。私，家族と父系の一族をもたない老いた一人の乞食に妹を与えるならば，後に地域の近隣の人達があげつらうことになろう。汝自身もまた後悔するのがふさわしくなるから，汝の婿には私はならない。それよりももっと良い妻が私自身にある」と言って彼の請問に答える歌を仰せになりました。

しからば，英明な貴族の系統のものよ
總じてまた女性は執着の因であり
相を見えたラマの妻女は非常に少い
（仏）道を女友達と一緒に行く事は稀有であり，またさらに
汝ら（常人）は誹謗の増益と損減をもつ
またそれ故に大印に依止することは難かしい
私は執着を離れた空の婦女
悲心の光彩のあるような女性
慈しみの微笑によって心を奪い
様々な赤白の格子を描いて
不二に出逢い絹布でおおう
等味の行のたすきをかけ
四つの歓喜の髪のリボンに
多くが一味のサンゴの首飾り
根本の眞実の意味を悟る美しさをもつ
それをヨーガ行者である私の伴侶としている
汝の輪廻の夫婦の絆を私は欲しない
施主よ，自分の家に帰りなさい

とおっしゃって，尊者は受け取らなかったので，更にまた請問して，「尊者よ，あなたは悟っておられますが，人に対し羞恥の分別意識を有たなくとも，私，(P.341)俗人は信心を発しませんから，この袴下を必ずとって下さい」と言って北方[9]の野馬（の袴下）を脱いでお伺いの意中を歌で申し上げました。

尊者は秘密なきヨーガ行者
禁戒を行じて裸で睡る事を心得ています
秘所には何もなく，宝はどこでも見せています
あなたは迷乱を内からこわし，それにより
悩ましい恥じらいを有たなくとも
私達俗人は恥じらいます
心の御意向が高く完全に覚った人も

9） チベット北方のチャンタン高原でそこの野生の馬のこと

速やかに所作をし，人と順じました
私，少年が穿くこの袴下を
材料は綿羊の柔かい毛を
母と妹の二人が一様に紡ぎ
賢い新婦が経綫を引き
隣りの娘が形に打ち
やさしい伯父が仕立をし
私，俗人の恥の衣
かくすこの北方の野馬の皮のものを献じますから
要らないとおっしゃらないで下さい

このように請問の意味を申し上げましたのですが，尊者は御口ずから，「愛しき者よ，汝は恥づべきと恥づべきでないのとの区別を知らない。私の外觀は悠然と抛り捨てているのを汝が笑っているそれは，第一に母の胎内からも衣服なしに裸で来たのである。最後に死の時にも意識は裸で出ていくのである。現在もまた改変する事なく，やり方は自然そのままこのように安立している。造作の恥について私は知らない。それよりも，愛しき若者よ，自らこの歌を聞くべし，とおっしゃって，彼の請問に対する答として歌を述べられました。

然らば，少年よ，良き男子よ
汝は恥でないものを恥としている
(P.342)
これは生れつきのしるしである
作られた恥を私は知らない
諸々の恥を汝は恥としない
悪行，罪悪とだまかし
羞恥は汝にはない
私は恥について以下の様にする
材料は菩提心の柔かな羊毛，それを
成熟する道である 四潅頂の純一な糸に紡ぐ
解脱の道である三味の織布を織る
清らかな誓願の材料を吹きつける
所作を心得ている仕立屋が
羞知をもつのが恥づかしい北方の野馬の皮を縫うこと
利他が解脱との恥の衣服（袴下）
汝の北方の野馬の皮を私は欲しない
施主よ，自分の家に帰れ

とこのようにおっしゃいましたので，少年が思うには，「偉大なこの人にどんな礼品を捧げても受け取らないから，どこに赴かれ，どこにいらっしゃるか」とお尋ねして，私自身の故郷に招請する必要があると考えて，「最勝の尊者よ，あなた様は礼品と供養は何れも受けとらなくとも，現在，この道の彼方に赴かれるその地方にいらっしゃるべき心の思いをおもちで，そうであるのでしたらそれを私にかくすところなくどうか話して下さい」とお願いしましたので，尊者は御口ずから，「子よ，そこに秘密はない。私は秋の収穫にはデンリで乞食をし，脱穀の

時にはニャナンから向うに行く。冬にはチィチワの空谷があるそこに居るのがふさわしい」とおっしゃったので，更にまた少年が思うには，「それでは，御滞在の数日，私自身の家にお迎えして，承諾していただいて，法を請問することを許していただけるかどうか」と考えて請問の意(P.343)を歌にして献じた。

無比な尊者，化身よ
あなたがデンリの方に行かれて更に
等味の乞食をなさろうと考えています
その地方には功徳は全然ありません
空が広大なデンリ，それは
人の善の思いは白い芥子よりも小さく
（人々の）手は寺廟の門よりも堅い
麦こがしは黄金の宝よりも得難く
百度に一度得ても，病気のもとと争乱
そこは飢饉の領域の城市です
ニャナンの方に行かれても
峠には広大な恐ろしい青い空
人民が強盗として徘徊している土地です
癩病人が夜行している土地
隠されこわいところが数えてもつきません
幾百の友なしには道を行けず
三歩程にも案内人を要します
ニャナン地方は柄が悪いといわれるそれは
ネパールとチベット二国の國境であり
上部はチベットの界，雪の國
夏は暑くなく，雪が降る
昼夜を分たない大きな風
人は畜生動物より愚か
河水はモンの方，南へと落ちる
下方の谷や洞窟は熱気のあるところ
ツァープン橋は命が危い
ネパールでは病と熱が生命を害する
人は南ネパールでは一つ言葉を有たない
林は硬直した屍体のようです
尊者よ，あなたのお出ましはその地にはなさらず
今しばらくお出かけにならず延期して下さいませ
あなたが末長い供養を受け入れないとしても
半月の間，招請致しますから
私，少年の地方にお出で下さい
尊者(P.344)よ，慈悲をめぐらし，お出で下さい

と施主がお願いしましたが，尊者は御口ずから，「そもそも我執ある施主を私は許さない。

若者よ，汝の村にもまた行く気がない。ニャナンとデンリ地方については詳しく，汝よりも私自身が詳細に知っているから，以下の歌を聞け」とおっしゃって，彼の願いに対する返事の歌を意趣されました。

然らば，思案をめぐらす少年よ
若者よ，変らざる信心でこちらに聞け
また更に地方において十善の一切と
罪過なき功徳ある人，その人と
今しばらく時がたってめぐり会うのはむつかしい
私，ヨーガ行者は心に何でも生ずるまゝにしますが
暴力的に話を口にすることはしません
デンリの麦こがしは得るのが難かしくとも
私の食物に良し悪しはない
外見上は，五甘露を用いる
おいしい食べ物の味に執着しない
私はそれ故に最低階級のヨーガ行者である
内には無分別の三昧を享受する
私はそれ故に食べ物への思いは少い
飢饉がすべてどんなであろうと歓喜し，歓喜する
山道に危険が大きくとも
加持力ある尊者への願を立てる
三宝は良き避難所
三界の空行母は案内に来る
友とは苦提心と一緒に結伴していること
八部神衆が迎えに降りてくる
私は財宝を有たないから敵と離れる
資財は一切どんなでも喜んで，喜んで使う
ニャナン地方は悪いところと言われても
人は無造作な昔人
話は造作することなく眞直(P.345)に言う
行いは造作なく悠々としている
飲食は造作なく，秘密はない
地域は造作することなく林がある
多くの財の福徳を私は願わない
飲食の食べ物に対し心は広い
私，ヨーガ行者のその知慧において安楽である
集会のさわがしさ，そこを少くし
平等住の三昧，そこを増大し
それ故にニャナンの方に行く
私はトゥンモの暖に自在を得ているから
冷暖二つの風の怕れを離れ
雪がすべてどんなでも喜んで喜んで親近する

しばらくは道程をのばすことは避けられないが
若者よ，汝の故郷に私は行かない
傲岸不遜な施主を私は好まない
強情な行いを私は知らない
更にまた太陽が輝いている間に馬に乗れ
愛しき者よ，少年よ，安楽に行くがよろしい
愛しき者よ，長寿無病の誓願を求めよ

とおっしゃったので，招請を思いとどまり，そこで彼は決心して，「尊者よ，あなたは礼物は何を献じても受け取らず，法は何を伺っても与えて下さいません。それは私の障が大きいからです。今，誓願をしてあなたの前で自殺して，どこへも行きません」と言ってから，非常に鋭い刃のある刀を心臓に突き立てて，お願いとして請問の意味を歌にして献じました。

尊者，大ヨーガ行者よ，お聞き下さい
私は今朝，陽ののぼる時に
ゴルブムという泉のすぐ近くに
裸でねむっている一人の人を見かけました
何(P.346)とまあ，風狂のヨーガ行者が一人
外見が狂行の人か
装束は何も見えません
あなたをつかまえどころのない人と思いました
心のまゝに，心底から誹謗しました
道を共にせず，避けて行きました
それをまた，尊者は心中御存知でした
威張った顔をしたのが恥づかしい
それから太陽の頂点が柔かくなった時に
ボン川の青い河水を渡渉して行った時
あなたが水上を鳥のように翔んでいくのを目にしました
空中を風の如くに浮いていくのを目にしました
神通を体であらわすのを目にしました
ツァン川の向う岸に到達なさった時
尊者，一人の成就者と出逢う仕方によって
私は習気の障碍が小さいと思い込みました
善縁，福徳が大きいと思いました
善業がのこり，良き誓願によると思いました
仏法に対し善根があると思いました
遠い昔からの嬉しいこと
私が母から生れてからありませんでした
幻としての財物の礼品を
欲せられず，不要とおっしゃるその人は
尊者，布衣のヨーガ行者だけであり
チベットの中で耳にすることだけでもありませんでした

また，あなたが偉大な稀有なお仕事
法を行うのが完全なのを見たことはありません
尊者はそれ程，大変稀有であっても
今日，(P.348) 午前の一日
私は請問の意味を捧げる仕方で
尊者よ，最勝の御心によって考慮されないので
私は悪業の障が大変大きい如くに
（私の）顔は福徳が大へん小さい如くで
仏法の善根がとてもないようです
私は心が弱く，心が迷っています
心もまた喜ばす，常に不完全です
仏道も全然わかりません
更にまた化身仏を再三見てから
慈恩の三句(P.347)を得ないならば
尊者に見えないのと全く同じでないでしょうか
家郷の人に何と言いましょう
再び郷里に帰るのが恥づかしい
それ故に自らの命を自ら断ちます
再び有情として生れて死んで
今程が死ぬのによいのです
尊者，唯一の成就者の御前に死にます
心に最上の法を聞いてから死にます
この話以上に何も話せません
尊者よ，神通力のある心でお知りでしょう
でも少年の福徳は小さいのです

とお願いしましたので，大事なものを捨てたので，尊者が心中思うには，「彼は私にこんなに信心して，求める心が大きい。そのことは誓願の関連があることである。昨日夢に出たそのことも，このことであったのは確かなことである。今，攝受する必要がある」とお考えになって，彼の請問に答うる歌を仰せられました。

愛しき者よ，少年，施主よ，こちらに聞け
汝は善き心，欲求が大きいあり方により
悪業の障碍が小さいのは確かである
請問の意味が大いに適切である仕方によって
我慢と我見が小さいことは確かである
精進努力が大きい仕方によって
懈怠が小さいことは確かである
布施を捧げる慈悲心の大きいあり方により
慳貪と貪りが小さいことは確かである
知慧と慈悲心が大きいあり方によって
痴と瞋が小さいことも確かである

私を特に信ずる仕方によって
前世でも勝法に依っていたことは確かである
愛しき者よ，それ故に心弱く言うな
汝がギャルドムの下から来たのと
私がグンタンから遊行して来て二人が
今日(P.348)の午前に
ボン川の青い水の岸辺で出逢った
ゴルブムの泉の水源で逢った
それは以前の誓願をした，その如くで
浄らかな関係があったことは確かである
アラヤ識の上の熏習からめざめたように
それ以前のよき関連を歌にし
今，正しい意味にふれるとき
愛しき者よ，心から仏道を思うならば
信心は深いところから生ずるなら
今生に後を見ないで
本当に私の後についてくるなら
親族とは悪魔のグループのおくらせ方である
（親族を）本当と思はず，帰属を断て
食物と財は悪魔のスパイである
慣れつつある悪の執持を止めなさい
ものをもらうのは悪魔の縄である
縛ることが必然であるので貪恋を捨てなさい
若き友は悪魔の下女である
惑わしが確かなものは調べなさい
郷里は悪魔の監獄である
解放が難しいときは速やかに逃げよ
また，一切を残して行かねばならない
今止めるならば，利益が大きい
幻身の石を積んでつくった人は必ず倒れる
今，因縁の準備をするがよい
心の禿鷹はどうしても飛ぶ
今，天空を截るのがよろしい
私が言ったその一切を耳にし実行するなら
愛しき者よ，汝に仏法に善根をもつ
入門の灌頂と加持を授けよう
甚深なる口伝の教誡を与える
愛しき者よ，汝は仏道の始めに到っている
ヨーガ行者の私もまた歓喜しています
少年の心はこのように思って下さい

尊者がこのようにおっしゃったので，彼に楽しい思いをおこ(P.349)させ，彼は非常に満足した。尊

者の足下に低頭し，何度も敬礼し，巡拝をなした。そして誓いを立てて，帰ると言いました。その後四ケ月程して，尊者がディンギマンルンチュワルにいらっしゃった時に，彼は親族と二人で来ました。母方の伯父は請問の礼品の白いトルコ石と，甥は1.5オンマの金を献じたが，受け取らなかった。その時，ラマ，バリ訳師と逢ったので，ツクトル・ナムギャル（頂髻尊勝仏母）の塔を建立していた時と同時であったので，尊者は御口ずから，「あなた方，伯父，甥の献じたそれは，私にはなくてもよいから，ラマ，バリ訳師に差し上げ，灌頂を頼みなさい。教誡は私自身が教誡します」とおっしゃって，尊者自身が案内して，ラマ・バリ訳師に最勝楽神の灌頂と究竟次第とをお願いした。ラマは彼ら，伯父と甥の二人に，後の法，ツクトルナムギャルの法類と長寿の儀式メルシンハの念誦法と聖者不空羂索の類との三つを与えた。仏教の法勝楽七文字の成就法とグルの名稱尊勝仏母の類とクルクララー女神の成就法との三つを与えた。そこで彼ら二人はラマ・バリ訳師をサキャまで送って行って，もとに戻った。尊者の許に五年間居って，大変有名なナーローパの六法と，國王マイトリーパから相伝した大手印の諸々の伝授を保持して，教誡を殘りなく与えられ，以前の名前を聞かれるとダルマ・ワンチュックと言われていたが(P.350)後に尊者がレパ・シュワォーと名前を変えました。彼は以前人法の時，（尊者に逢う前は）非常に威張っていましたが，後には世俗の心を放捨した者となりました。それから尊者の前で布衣のみ以外は着用しませんでした。皮の靴も履きませんでした。故郷にも帰らず，二日間の食物の貯え以上のものを持たないという誓いの諸々をも献じました。努力して修禪して良き体験が生じたので，尊者は喜んで，次の歌を述べられました。

最勝のラマ達に敬礼する
成就を相続させるこの慈悲心をもつ者の加持力は大きい
マルパとミラレパの教誡の可能力は大きい
少年，このシワォーは修禪と忍耐が大きい
空行母達が知ることは速やかに生じた
弟子よ，修行の極みを得たいならば
意味のない話をすることなく
法を偏向せずに行え
人は以前の種姓を思はずに
空寂なところ，人のいない空谷に遊行せよ
悪友に従って結伴することなく
たった一人で相續に的中すべし
敬重して行うことを欲心せずに
謙遜に気力を修禪の成就に努めよ
速やかに成就のしるしを得たいと思うな
修禪は死ぬまで平等に行え
語句と名稱を学ばずに
口伝相続の教誡を散乱することなく修せよ
己れを利益したいと思うならば
言説を捨てて修禪を成就せよ

とおっしゃったので，シワォーは「以前に知ることを学んでも，修禪をしないならば，岐路があると言うのはどのようなことか(P.351)」とお伺いしましたので，尊者は御口ずから，「今生を内

心から捨てないのと要点を知らずには岐路が生ずるのである。私はマルパの児孫として相続している。岐路なく，語句と言説とを学ばずに，ただ修禅だけに集中して下さい」と次の歌をおっしゃいました。

最勝のラマの足下に帰命する
語句による迷乱の教示をする，その人は
闘争時にはだます人としての狂乱をなす
説話の時にずるい者は閑談をする
眠る時には尊大に眠りふける
歩く時は鷹のように歩き廻る
障碍と岐路がそこに多い
総じて三界と六道はそれぞれ錯処
異生，凡夫が欲している行は錯処
声聞と独覚は安楽の状態に迷う
学者は食物の方便として錯処である
ヨーガ行者の狂気の隙間に入るのは錯処
大禅定者が空見に昏倒するのは錯処
一切の無知は錯誤と重大な危険
口頭伝承は空行母の気息
錯処があると思うのが悪魔であるから
大布衣者の許のシワォーは
錯処に陥るならば迷惑である
疑惑を捨てて修禅の成就をせよ
直接の教示のはっきした実行において
錯処が生じたならば本物ではない
弟子よ，言説を求めることに心せず
一頂に修禅し，そして果を得よ

とおっしやったので，（シワォーは）言説を捨てて，一頂にラマの許で衣食の大へんな欠乏をものともせずに，修禅していた時に，以前の一人の友人が到着した。そして彼は(P.352)レパシワォーの衣食等食と財産と離れた急迫した健康の悪化した状態の彼を見て，誤解した同情心をおこして，彼が言うには，「名前を聞けば，ダルマ・ワンチュックよ，あなたは始めは大変な金持のかわいい息子であったが，今は老乞食，食なく，衣類なく，このような者となっているのは驚いた」と言ったのに返事として，レパ・シワォーは以下の歌を述べました。

師父，ラマ尊者，仏陀の本性よ
父母双方への供養のよりどころ
親戚，（七）親等に至るまでは輪廻の因
その私もまた近親を捨てている
自己そのもの独りだけで仏の本性で
法の伴侶が善行のよりどころ
三人四人以上は空論のもと

この私もまた，ただ一人一処に留っている
教誡の一句が仏陀の本性
はっきりした小経典は沙門のよりどころ
種々の多くの書冊は我慢のもと
この私もまた筆録しない一人です
山中の寺は仏陀の本性
食物を鳥が求め（蓄えない）あり方は沙門のよりどころ
多くの財物，資産は執着のもと
この私もまた故郷を捨てて一人でいる
國境によらないのは仏陀の本性
信心ある乞食は沙門のよりどころ
召使いが多いのは煩らいのもと
この私も召使と離れて一人でいる

とおっしゃった。彼もまた信心をおこして多くの財物を献じた。尊者もまた非常に喜んだ。尊者のお体が入滅するまでの間召使をし，後に成就し，法の教誡(P.353)を完全にミラレパから聴聞し，証悟の諸錯処を断っていたのである。甥は布衣者にならず，尊者は少しも喜ばなかった。愚かな出家人，サンジェーキャップ（仏護）といわれ，ニャナンのラナに小寺をもっていたと言う。レパシワォーその人は，尊者が入滅の後に，パドックキ・ゴルンメンチューの洞窟で修禪して最後に，証悟の地と道の一切のすぐれたところを究めて，坐禪の洞窟の岩崖を通り抜けることが出来て，御生涯の間に空行母の地に到ったのである。グルブム泉等レパシワオーの章終る。

む す び

このレパシワォーの章は「グルブム」の中でも長い章の一つであり，またそこで一日の中，朝から日中の間の出逢いにおけるミラレパと少年とのやりとりが描かれている。このやりとりにおいて歌によって教えるところを述べるのはミラレパのみではなく，少年の方も歌にして自らの思いを表明する。ミラレパと少年との対話は内容としてはミラレパの接得教化の仕方により，すなわち，外的なものである寄捨されるものは，内的な意味としては，すべてヨーガ行者ミラレパの内にあることの教示により，これによって寄捨を媒介としながら少年の方がすべてを否定しつつ，精神の転換をたどり，ミラレパの弟子となり，仏道修行に入るという過程が極めてダイナミックに描かれていることがこの章の特徴である。

以上は概要であるが，本文の譯に見られるようにその記述の内容は極めて豊かである。この記述，ミラレパと少年の具体的な一人の個人の精神の展開の記述は他に見られないような詳細なものである。他というのは差当りインド仏教であるが，このような人格の声は殆んど記述されていない。ヨーガ行に関係のある仏教者においてもヨーガ行の展開は詳しくない。例えば瑜伽行唯識派の行と理論の建設者と見られる無着，世親の著作には一般化された実践修業法と理論とか残されているが，どのように修行したかという具体的記述を見ることが出来ない。しかるにここに極めて内容豊かな個人の実存的な記述があるのである。このことは学解的，理論的な記述の多いチベットの仏教書の中でも異色である。

全体の筋書きをまとめると次のようになる。全体の伏線としての夢のお告げによってミラレ

パと少年との出会いと，少年がミラレパの勝れた弟子の一人となることが述べられる。朝，少年は泉のほとりで裸身のヨーガ行者ミラレパに逢う。少年の馬に乗せてもらって対岸に渡ることをミラレパは依頼する。少年はこれを断るが，ミラレパは神通力によって水上を渡って対岸に着く。これを目にした少年はミラレパに信心を抱く。そしてミラレパにその経歴を問うとミラレパは自らの経歴と師資相承を述べる。ミラレパの自己紹介の後に少年はミラレパに喜捨，すなわち布施を行おうとするが，差し出すものはことごとくミラレパにそれよりよいものがあるとされて断られる。少年ダルマ・ワンチュックの喜捨てとして差出されたものは次のとおりである。

1）黒茶色の馬，2）インドの靴，3）上衣，4）毛織物の肩当て，5）帽子，6）トルコ，石，7）三つの武器，すなわち刀，弓，槍，8）脇差，9）寺の建立，10）妹をミラレパの妻女としての提供，11）袴下（パンツ），12）滞在と法話の申し出，13）自らのすべての断捨としての自殺である。13）は喜捨に加うべきではないであらう。それはものではないからである。しかし少年の心の中では明らかに喜捨の究極的な姿を示している。

12）の項のところではミラレパは少年の故郷への招請を断り，他の地方，デンリとニャナンへ赴くと告げたのに対して，少年はこの両地方に対する悪評を 述べて，ミラレパを止めようとするが，ミラレパはそれと反対の観察と平等な立場を述べる件りが挿入されている。

最后に少年は自らを反省，後悔し，自己の高慢を捨ててミラレパの弟子となり，ミラレパは仏教者としての具体的な心要を教える。灌頂と加持を授けて修行の問題点を示し，ミラレパは弟子に教導を与える。弟子となり，名をレパ・シワォーと改めた少年が訪ねて来た旧友に自己の境涯を述べる。終りにレパ・シワウオの生涯をまとめる記述が来る。

この様な構成による展開はすぐれた精神の記録であるが，その背景的な状況も併せて理解すべきであらう。以下のトピックスによって個々の問題と背景に言及しよう。

〔夢のお告げ〕 夢に空行母が現れて，明日，ミラレパが少年と出逢い，その少年がミラレパのすぐれた弟子になることが約束される。この構成は仏教文学における授記と稱する予言的なジャンルに負うている。インド，チベット，中国，日本にその例は少しとしない。最后に，少年はミラレパのすぐれた弟子の一人となるという結果を先取りした記述がある。この話は意識的にこの授記文学的な構想によって潤色されたとも見られよう。事実，「十万歌謡」の種々の伝本が文献学上は種々のヴァリアントを含むこと，ボン教徒との対輪，神通力較べが歴史的事実かどうか疑う余地があることがこれを裏書きする。この点は「十万歌謡」の諸伝本の研究を俟って詳論したい。だがミラレパはこの全過程を始めから見通していて，それがより文学的に形を整えたとも言えよう。ミラレパの見通していたところは，少年が法器かどうか，どれ程の経過を要するか，何時，少年が日常的世界からヨーガ行の世界へと転換し得るかということであり，ミラレパの手中には少年に如何なる教授を与えるべきかということもはっきりしていたのであって，この物語的構成の中核は文学的潤色ではないことも確かである。

〔自己紹介〕 ミラレパが自己紹介する仕方は「十万歌謡」において一般的な定式として認められる。すなわち「汝が私を知らないならば，こちらに耳傾けよ，我こそはミラレパ，グンタンの出であるぞ」という言い方である。この自己紹介はチベットの民歌にあるものであり，チベットの英雄敍事詩である「ケサル王伝」の中でケサル王が自らを名のる決った方式でもある。ここにミラレパと民衆との接点を見出すことが出来よう。これによって民衆は舞台に登場する主役をはっきりと確認することが出来る。ここにまた教理ではなく，具体的な人格の媒介が見られ，またミラレパの方は自らの接得による活作略に対する自信をも示す。この自信は自己の誇示ではなくて，自己否定の果に生れた活きたはたらきそのものであり，ミラレパを通じ

て仏法が生きて働くものである。この点は，自己の誇示に終始する英雄ケサルと根本的に異るところであり，短い自己紹介の句のみでは同様と見えるものでも，全体のコンテクストからは自己否定の後のはたらき手としての自己を名のる仕方と解すべきである。この点ではStein博士の指摘[10]は十全ではない。

〔自己否定〕　少年がミラレパに喜捨するものがことごとく断られることは，単にものがあるから，ミラレパにとって不用であるから否定されるという意味だけではなく，より深く喜捨する方の精神の自己否定を迫りまたそれをつきつめていっているものである。ここでは喜捨そのものは布施の功徳という意味で認められるのではなくて，自己の我執を捨てることへの道として示されているのである。喜捨そのものは我執をはなれ，喜捨する人，される人，されるものに有我の見を認めてならないことは一般に教理上知られるところである。そして事実，チベットのみならず仏教の伝播した地域において，道徳を守ることと，僧伽に喜捨することは在家者のなすべきこととされ，これが当然とされていたし，現在もその通りである。貧しい民衆がラマに，僧院に自己にとって軽からざるものを喜捨する姿を今日も尚見ることが出来るが無用とし，自ら使うことをすすめることは極めて例外的な社会的事象である。ここに見られる喜捨はどんな場合でも，そのように解されようが，何がしかの自己否定なしにはあり得ないであらう。ここに言われているのは部分的な自己否定から，全面的な自己否定である。喜捨する人，ここでは「施主よ」と何度も呼びかけるが，施主の方の我見の滅却へと進み，それが少年の自己転換に至る。一方に良いところもあるが，他方に悪いところもあって，悪いところをなくすれば良いという部分的な修正ではなく，良いところにも悪いところにも，両者の背后にある，我見を明らかにし，その虚妄を転ずることにミラレパの接得法の一つがあると見られる。施主は不知の裡に自らを愧ぢ，自己の転換へと進み出す。精神を深化する，あるいは高くのぼりつめていく過程がここにまざまざと見られる。

この自己の全面否定への道は，休みを入れながらではない。経過的には段階を追っているように外から見えようが，少年の意識にとっては間断するところのない，間隙を入れない進行である。この点では一超直入如来地というような消息をここに少しく見てとることも出来よう。勿論，このような接得は師と弟子との人格的接觸によって間断なく行われ得るものであり，一般論としての学問によって得ることは根本的に困難であろう。

〔外的なものから内への転換〕　この歌謡の大部分を占める喜捨とそれを否定し，内的に別に解釈することはヨーガ行の理解を前提としようが，内的な意識と行為の転回をそれ事態として記述することは唯識を俣たなくとも可能であろう。むしろ世俗にも妥当する一般的な認識論として唯識の体系を理解したり，批判することよりも，内的，弁証法的な精神の現象学が必要であろう。この点において分別から無分別に転ずるヨーガ行の原点がミラレパにも見られよう。さて外的な喜捨のものをヨーガ行者の内的なあり方として解釈することは，ものの世界から心のあり方への転換である。その例を二つとり出して見よう。

第一はミラレパにタントラ行者のパートナーとしての女性，妻女を配慮することを例にとらう。この場合，タントラの行者はインド，チベットにおいて性的ヨーガ実習のパートナーとして女性，または奥方を有っていたという一般的状況をも配慮する必要がある。ミラレパに近い例では師のマルパは奥方をもち，子息もあった。これにまつわる問題点についてミラレパは女性が執着の因となり，すぐれたラマの妻女は非常に少く，仏道を共に行ずる伴侶としては極め

10）R.A.スタン「チベットの文化」山口・定方訳，昭和46年，pp.296－299参照．チベット文「格薩尓伝奇・霍岭大戦」西寧。1980　vol.1 p.558参照。

て稀であることを述べているのは，当時の一般的状況を示すものであって，ミラレパは女性パートナーを有たずに修行したことはチベットの僧俗の偉とするところである。

ミラレパにとっての女性は，我執を離れた空，悲心が輝きをもつのが女性であり，また慈心の微笑，飾りは不二の行，等味の行が，夫々女性を飾る絹布，たすきであり，四つの歡喜は髪のリボン，一味の体験がサンゴの首飾りであって，根本の眞実の意味を悟ることが美しさをもつこと，それがヨーガ行者の伴侶であるというのである。ここにおいては対象化的に外部の人格に仏教の理想を投影するのでなく，自己の分別を転じているところに肉身の女性以上のものを見ているのである。

これにつづく第二の例は，ミラレパに対する袴下の提供の例である。ミラレパは僧衣すなわち三衣ではなく，たった一枚のぼろの布一枚を身にまとっていた，従ってこの貧しい着物では男性のリンガムをかくすべき袴下を着けていず，そこが露出していたのであり，それを少年は恥づべきこととし，そこをかくすためにりっぱな袴下を喜捨し，すすめるのである。このことは一般的に恥の問題として解されよう。インドやチベットでは秘所をかくすことは一般的なかなり強い社会的な規正としてのマナーである。今日でもインド，チベットでは僧俗とも，入浴，沐浴の場合，普段はパンツを着用しない者でもこの時に限り，人の視線があらうとなからうとパンツを着用する。このような事は日本人と異っているが，この点からしてミラレパのリンガム露出は人々を驚かすものであり，インドの行者が全身裸身であるのとは異った意味をもつであらう。ミラレパは何が恥であり，恥でないかを問う。自然の造作そのものは恥ではないとし，行為において悪をなすことを恥とする。世人は多くこれと背反するのが常であらうか。ミラレパにとってはリンガムの露呈は二次的な事にすぎないであらう。袴下の材料としての羊毛は柔軟心である菩提心，糸を紡ぐのは四灌頂でそれが道を成熟する。織布は解脱道である三昧，染料は誓願，所作を心得ていることが仕立屋，野馬の皮は羞恥心，衣服は利他と解脱である。

この例からも知られるようにものから事への転換であり，ミラレパにとっては喜捨されたものの意味は事として改めて解釈しなおされるのである。

ミラレパのこの態度は一切に平等に接すること，無分別な我執のない自由な態度である。デンリとニャナンの両地方に対しても，一所不住のミラレパは自然に対して無差別平等に接したのと同様に，社会に対してもこの根本的な態度を持した。氏族社会，地縁社会，貴族と民衆，僧俗に対しても，我見をもたずに見ているのであって，屡々自然に対しては喜怒を超えて接し易く一体感情をもちやすいが，人間や社会に対して平等に接することの実例をここに見ることが出来よう，以上のような内的に転換する例の古い例はスッタニパータにも見られる。第一の四の「田を耕すバーラドヴァージャ」でも托鉢の釈尊に対して，釈尊も耕作して食物を得よというのに対して，釈尊は自らも農夫であるとし，信仰を種子，苦行が雨，智慧が軛と鋤棒，心が縛る縄，等々の内的な徳の実践によって耕作者というのである。これはバラモンを社会的な見地からでなく，行爲としてのバラモンとして，見ることにおいても見られた事である。

但しこのような内的解釈の仕方は説く者，行う者がその人格的感化力をもたない限り，却って珍妙なことばのいたずらと見えるであろう。この点において師弟の間における問と答の人格的境涯を通した展開においてしか，このような内的解釈の意味は展開しないであろう。この意味においてミラレパがこの章の終の方で述べる学理に対する批判はこの問題と一体となっているものである。

〔学理に対する批判〕 弟子に対する接得の一つとして学理も自由に適切にその器に応じて用うべきである。然し学理，ここでは仏教教理はそれ自体の完結した体系をもつことを志向するのが自然な勢いである。この一般化，客体化，矛盾なき説明は仏教史にも見られるところで

あるが，一般化された知の体系となった学理は仏教教理であっても修行の現実にそのまゝ即し，説得力をもつとは限らない。個々人の情況に応じた苦悩とその解決は学理によってつくされるとは限らない。單に知の体系または断片として自己の実存に関りなく学習し得るのである。ミラレパはこの点を衝いている。「語句による迷乱の教示をするその人は，闘争時（カリユガの時代，末世）にはだます人ととして狂乱をなす」といい，終りに少年に対する必要として「弟子よ，言説を求めることに心せず，一頂に修禪し，そして果を得よ」と教示する。この態度は出家したレパ・シワォーにも見られる。彼自身が後に，旧友に自らの境涯を語っていう。「種々の多くの書冊は我慢のもと，この私もまた筆録しない一人です」という。一般的に言っても学問は自己の実存と関りなくもあり得るが，しかしまた岐路，錯処に当面した時に正しい道，伝統的に有効な方法とされたものを示して道を錯らせない働きをもつこともあり，また自らの体験，実情を故人の跡に照らし，理によって位置づけて，その現状を確認したり，体験を自ら吟味し，深化せしめる働きももち得るであろう。だがこの学理自体が自ら錯所をもち得るであろう。しかし現実にはこの実修と学理は必ずしも双運の関係にないことは，仏教史を見れば明らかである。この大きな対立の例は中国における教理と禪の対立である。ミラレパはあくまで具体的な人格的接觸においてその接得を行った。それは当時チベットにおける大寺，学問寺，その中での教科書（yig cha），一般的な学説を述べる宗義書（grub mthaḥ）が成立しつつあり，インド伝来の諸学，論理学を始めとするカリュキュラムが成立しつつあったのである。この学解を，インド伝来の学問を誇ることは当時は流行していたと見られる。ミラレパの弟子レチュンパは敢えてインドに新らしいタントラのテクストを求めて行く。インドからの仏典の輸入，翻訳，抄本が多く行われ，例えば，ミラレパの同時代者カーダムパのポトワの「ラムリム」は全篇インドの仏典の訳文の抄から成り立っている。そこにはミラレパのような自らの境涯を自らのことばで述べることはないのである。

しかしまた学理と同様タントラの成就に努める者にもいかさまな者があったことはミラレパの「十万歌謡」18章に出ている。ミラレパが風狂の人としてあらざるを得ない仏教界の状況があったのである。権勢と講学と僞者達の中にあって，ミラレパの姿は狂とも映るのである。

学問と仏教の修行との関係についてはミラレパとパラレルにものとして禪宗の例がある。それは周金剛王といわれた徳山宣鑑（780－865）の事例である。道元禪師は「正法眼藏・心不可得の巻」において次のように述べる。金剛経の講学者，徳山が餅を賣る老婆から「過去心不可得，現在心不可得，未来心不可得」と金剛経に出ているが，和尚は何れの心で餅を食べるかと問はれて答え得なかったことに対する評言がある。「うらむべし，数百篇の釈主，数十年の講者，わづかに幣婆の一問をうるに，すみやかに負処に落ちぬること。師承あると師承なきと，正師の室にとぶらふと正師の室にいらざると，はるかにことなるによりてかくのごとし。――中略――徳山このときはじめて，書にかけるもちひはうえをやむるにあたわずとしり，また仏道修行には，かならずそのひとにあふべきとおもひしりき。またいたずらに經書にのみかかはれるが，まことのちからをうべからざることをも，おもいしりき，ついに龍潭に參じて師資のみち見成せしより，まさにそのひとなりき」[11]

講学にも師資相承はあるが，それは境涯を吟味し，正知を点検することではない。この点においてミラレパと禪宗のあり方は並行していると言ってよい。実習，実践を特に強調することは，学理の体系化された時，そこに各派の相異点が顕わになって来たときに出るものであって，この点で場は異るが，当然に生ずべき批判であった。

11）岩波文庫版「正法眼藏」上pp.270－1

この師資相承の展開においてレパ・シワォーの出家得道はミラレパの接得法の生きた範例となっている。なお，ナーローパの六法[12]についてはここに言及があるが，ミラレパにおいてその六法が体系的に用いられたようではなく，各人の情況に応じて用いられたと見られる。ここの主題はそれよりも施主の回心であるので，それへの接得を中心に解説を加えた。

（1993年９月１日受理）

尚，この論文の（１）の中でp.5（1992）ℓ.14の彼がゆらいでは，波がゆらいでと訂正する。またこの論文1992年以降のアジア思想史の講読のノートをもととしたものである。

12）ミラレパにはナーローパの六法の語があるが，六法の中，トゥンモの熱（臍輪の火），幻身，夢，中有，双運，遷有の語が見えるが，その具体的な修法は示されていない。この章の夢のお告げは六法の中の夢とはし得ないであらう。